

新しい日常

-市ヶ谷キャンパスを舞台としたサイト・スペシフィック・アートの研究-

稲垣ゼミ

山本葉月、張錦哲、鈴木南都、徳永歌代、秋月亜美奈

私たちは市ヶ谷キャンパスを舞台に、コロナ禍の「新しい日常」におけるコミュニケーションの変化をテーマとしたインスタレーション作品の制作を行った。

新型コロナウイルスによる集団感染防止のため「三密」を避けるべく、法政大学では昨年4月から対面授業が制限されている。これによりキャンパスには以前のような活気のある光景は見られなくなってしまった。また私たち学生は、他の学生や先生と関わる機会が減少してしまったことで、大学の人々との繋がりが希薄になってしまったように感じていた。だが、私たちはこの厳しい状況下でも、様々な工夫をして学習や研究に取り組んできた。コロナ禍で人と人との関係が全くなくなってしまったわけではなく、私たちは以前とは異なった形でコミュニケーションを取り、お互いに繋がっているのである。その繋がりは、少し前までキャンパスで人々と頻繁に会い、群れていたことを忘れさせることもある。

私たちは対面授業の制限以降、ゼミでの活動で新しいコミュニケーションについて思索を巡らし、様々な実験を行ってきた。そしてコロナ禍の中で行われる今回の学会では、コミュニケーションが「新しい日常」においてどのように変化したのか調べ、視覚化したいと考えた。法政生をはじめとした大学に関わる人々にとって、キャンパスは生活の上で長い時間を過ごす場所である。議論を重ねる中で、自分たちにとって身近で大切な場所＝市ヶ谷キャンパスを舞台に、その場所でのコミュニケーションを主題に取り上げたいという結論に達した。そこで私たちは、コロナ禍の「新しい日常」におけるコミュニケーションと対比させるため、市ヶ谷キャンパスを舞台としてインスタレーション作品を制作することにした。

制作は以下のように進めた。まず、コロナ禍以前に市ヶ谷キャンパス内で体験した出来事を学生や先生から収集した。次に集めたエピソードを文章にまとめ、映像データとして仕上げた。収集した出来事の規模は大小様々であったが、ささやかな思い出こそ現在では失われてしまったコミュニケーションであり、だからこそ取り上げるべきだと考えた。最後にキャンパスへ赴き、出来事に対応した場所へプロジェクターを持参し、映像を投影した。映像内の出来事ひとつひとつは、すぐに忘れてしまうほどたわいもない物であるが、コロナ禍によってその平和な日常は失われてしまったのである。この事実を文章で客観的に再現し、投影によって現在のキャンパス風景と重ね合わせることで、キャンパスから失われてしまったコミュニケーションの存在を再び見出そうと試みた。

制作にあたっては場所の特性や場と人との関係性に言及する「サイト・スペシフィック・アート」注1の試みを参考にした。例えば、川俣正のアート・プロジェクトでは、再開発で不浄・危険なものが取りのぞかれていく横浜駅周辺の状態とウイルスをめぐる混乱から

ヒントを得て、偽の工事現場が制作された注2。今作品の制作は、多くの人が集まって活動するための場であるキャンパスが、本来の特性を活かしていない点に注目したことから出発している。また場所と人に関する概念の一つで、文化的・歴史的・社会的な場所の可能性を意味する「ゲニウス・ロキ」注3について調べ、大学は特別な場所であるということ、そしてこの事実を鑑賞者とともに再確認したいという発想が生まれた。

作品の具体的なイメージは、アーティスト・佐藤雅晴の作品を参考にした。《東京尾行》注4はカメラで撮影した風景の一部がアニメーションになっており、現実と非現実が交錯する特異な作品である。現実の風景と非現実の会話を混ぜ合わせて新たな風景を生み出す試みについて佐藤の映像からヒントを得て、制作メンバーの間で試行錯誤を重ねた。

作品公開後、先生方をはじめとする鑑賞者からは、「コンセプトが練られている」、「映写されたメッセージには面白いものがあった」等の感想を頂くことができた。特に、閑散としたキャンパス内に文章が静かに流れる演出に好意的な反応が多く、「コミュニケーションの変化を視覚化する」という目的はおおむね達成できたのではないかと考えている。しかし、「単なる思い出紹介になっていないか」という指摘もあった。出来事の収集がゼミ生中心であったため、鑑賞者によってはなじみのないエピソードが多くなってしまったと考えられる。これからの制作では調査対象をさらに広げ、内容の質をさらに高められるようにしたい。

「新しい日常」が長期化する中で、次々に変化する状況に戸惑い、以前の生活を羨む人は多いように感じられる。今回の制作のように、現状のあり方について改めて考えることは、コロナ禍終息後の生活における展望にもなるように思える。

注

1. 特定の場所において、その特性を活かして制作するという概念。

<https://bijutsutecho.com/artwiki/95> (2020.11.9)

2. 川俣正「都市への挿入」

<http://bankart1929.com/life6kawamata/> (2020.11.9)

3. ゲニウス・ロキ

<https://artscape.jp/artword/index.php/%E3%82%B2%E3%83%8B%E3%82%A6%E3%82%B9%E3%83%BB%E3%83%AD%E3%82%AD> (2020.11.9)

4. 佐藤雅晴「東京尾行」

<https://www.youtube.com/watch?v=ho4fWB3A2KE> (2020.11.9)

図 1~5 新型コロナウイルス感染への対応のため、インスタレーション作品は映像記録として提出・審査された。以下の図は映像記録からキャプチャーしたもの。



図 1 作品の映像記録オープニング



図 2 富士見ゲート学生ホールでの記録



図 3 外壕校舎エスカレーター



図4 外濠校舎の教室

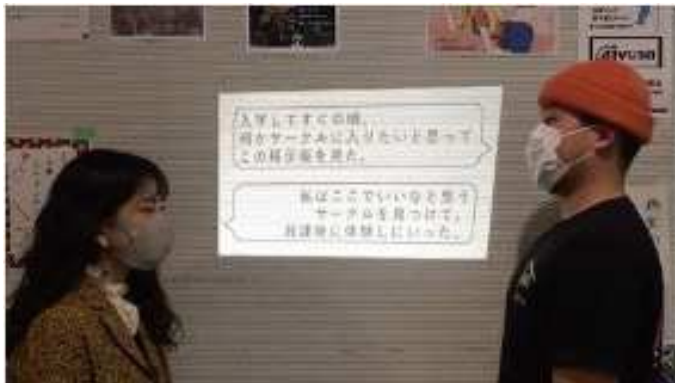


図5 外濠校舎・サークル掲示板前